研究ノート

ジャータカにあらわれる辟支仏

長崎法潤

一

初期仏教の源流について、ここ数年間関心を抱いている。まず、初期仏教の古層経典とジャイナ教の古層聖典とを比較しながら、仏教用語や思想の源流をたずねる。次に逆にその源流からどのように変化を受けながら流れて、仏教独自の用語や思想が形成されていくかをたどるのである。なかなか困難ではあるが、たいへん興味深い作業でもあり、これによって初期仏教の独自性が明らかになるのではなかろうか。

この源流をたずねる研究の一つとして、二年ほど前から辟支仏(独覚、縁覚、paccēka-buddha, pratyeka-buddha)に注目している。すでに先学の研究によって、初期仏典における辟支仏について多くのことが明らかになっている。辟支仏は、『スッタニパータ』、『ダンマパダ』など古層に属する経典には全く現われない。ニカーヤでは相応部、中部には一、二例しか見られず、長部には一度も現われない。増支部では数回現われる。小部に属する、比較的成立のおそいものになるにしたがって、現われる回数が多くなっている。漢訳の阿含経ではパーリの四ニカーヤよりやや多く現われている。『スッタニパータ』第一章第三「犀角経」は本来辟支仏とは直接関係のない経典であるが、小部『チュッラ・ニッデーサ』では「犀角経」は辟支仏の説いた詩であると記されている。また、小部『アパダーナ』第一章第二「辟支仏の譬喩」のなかに「犀角経」の四一詩がそのまま引用されている。このようなことから、辟支仏の観念は、阿含ニカーヤの初期にはまったくなく、その中期頃に初めて成立し、後にな

るにしたがって多く説かれるようになった、と考えられる。

ところで、辟支仏はジャータカのなかに数多く登場し、興味深い辟支仏物語が伝えられている。そこでは辟支仏の観念はすでに定着し、辟支仏について定型の表現もできあがっている。辟支仏は、ブッダが出る以前の世にあらわれて、ブッダ誕生以前に般涅槃する。したがって、ジャータカ物語は辟支仏の登場する世界である。

ジャータカにはさまざまな辟支仏物語が語られているが、それらを、(1)辟支仏になる物語、(2)辟支仏に対する布施とその果報、(3)辟支仏の入滅と舎利供養、(4)その他の辟支仏物語、の四種に分類することができる。本論では、そのうちの、「辟支仏になる物語」をとりあげ、その記述を整理し、系統図をさぐってみたい。なお、辟支仏の記述に定型の表現があるので、整理のために記号番号を付すことにする。

「辟支仏になる物語」に分類されるジャータカには次のものがある。

『ジャータカ』四〇八「陶師前生物語」
『ジャータカ』四五九「水前生物語」
『ジャータカ』四二一「理髪師ガンガマーラ前生物語」
『ジャータカ』四九一「大孔雀王前生物語」
『ジャータカ』三七八「ダリームカ辟支仏前生物語」
『ジャータカ』五二九「ソーナカ辟支仏前生物語」
『ジャータカ』五三九「マハージャナカ前生物語」

二

『ジャータカ』四〇八「陶師前生物語」は、辟支仏になった四王の物語であるが、まず、この物語を手がかりにして、どのようにして辟支仏になったかを見てみたい。カリンガ国のカランドゥ(Karandu)王が、従者と遊園に行くと、甘い実をいっぱいつけたマンゴーの樹を見つけた。象の背に乗って一個のマンゴーをとって食べた。その後、大臣もバラモンたちもそのマンゴーをとり、何回もやって来て枝を落とし、熟していない実をも残さずとってしまった。夕方、王がそのマンゴーの樹のところを通り、眺めながら、「この樹は、朝のうちは、実をたわわにつけて輝いて立っていたが、今では実をとられ、枝は折られて、みすぼらしく立っている」と思った。王は、ほかの実をつけないマンゴーの樹を見つけ、「あのマンゴーの樹は、実をつけていないがために、宝石の裸山の

ように美しく立っている。この樹は、実をつけていたために、こんな災難にあってしまった。家庭のこの生活は実のついた樹に似ており、出家生活は実のつけない樹に似ている。財産のある者には恐怖があり、ない者には恐怖はない。自分も実をつけない樹のようにならなければならない。」と考えた〈マンゴーの樹、P—A—1〉。王は、「果実の樹を対象として、樹の根もとに立ちながら、〔諸行無常、一切皆苦、諸法無我の〕三相を観察し、観を増大させて辟支菩提智を起こし（phalarukkhaṁ āramaṇaṁ katvā rukkhamūle ṭhitako va tiṇi lakkhaṇāni sallakkhetvā vipassanaṁ vaḍḍhetvā paccekabodhiñāṇaṁ nibbattetvā）〈覚り、P—B—1〉」、もはや自分には迷いの生存はない、と思った。王は辟支仏の姿になり、「空中に立って大衆に説法し、虚空を通って北のヒマラヤ山にあるナンダムーラ洞窟へ行った。（So ākāse ṭhatvā mahājanassa ovādaṁ datvā anilapathena Uttarahimavante Nandamūlapabbhāram eva agamāsi.）」〈説法・洞窟、P—G—1〉〔Jātaka III, PTS, p. 377.〕

ガンダーラ国のナッガジ（Naggaji）王は、両腕に宝石をちりばめた腕環をはめた婦人が香をすりつぶしているのを見ていた。そのとき、その婦人は、右手の腕環を左手に移し、香をすり始めた。左手に移された腕環は他の腕環と触れ合って音を立てた。これを見て、「離れていると、腕環は触れ合わないが、他の腕環と触れ合うと音を立てる。人も同じである。二となり三となると、互いに触れ合って争って議論する。自分は、カシュミールとガンダーラの二国の住民を支配している。自分も一つの腕環のように、他を支配することなく、自分だけを支配して住すべきである。」と思った。王は、接触する腕環を対象として、同じように三相を観察して辟支菩提智を起こした。〈腕環、P—A—2〉

ヴィデーハ国のミニ（Mini）王は、肉片を奪って空中にまいあがった鷹を、他の鷹や鳥が取り返そうとして争っているのを見て、肉片を奪った鳥には苦しみがある。棄て去った鳥には楽がある。五欲をむさぼるものには苦しみがあり、それを棄てたものには楽がある。自分も五欲を棄てて安楽に生きるべきである、と考え、同じように三相を観察して辟支仏になった。〈鳥、P—A—3〉

パンチャーラ国のドゥンムカ（Dummukha）王は、一頭の牝牛を何頭かの牡牛が欲情によって追いかけ、嫉妬で互いに殺し合いをするのを見て、生きものは、欲情によって苦しみを受けるものだ、自分もそのような欲情を棄

てなければならない、と考えた。王は、同じように三相を観察して辟支仏になり、ヒマラヤ山のナンダムーラ洞窟に行った。〈牡牛、P—A—4〉

ここに、四王に共通する辟支仏の姿に関して述べておかなければならない。王が辟支菩提智を起こして、長いあいだ立っているとき、大臣達が話しかけると、「わたしは王ではない、辟支仏である」と答えた。大臣が、辟支仏はあなたのような姿のものではない、と言うと、王は、彼等はどんな風なものか、と尋ねた。〈対話、P—C—1〉。大臣達は、「頭髪と髭とが剃られ、袈裟衣をつけ、家族や種族に近づかず、風によって吹きちぎられた雲のようであり、ラーフから逃れた月のようであり、ヒマラヤ山のナンダムーラ洞窟に住んでいるものであります(Oropitakesamassukāsāvavattha-paṭicchannā kule vā gaṇe vā alaggā vātacchinnavalāhaka-rāhumuttacandamaṇḍala-paṭibhāgā Himavati Nandamūla-pabbāre vasanti.)」と答えた。〈対話・辟支仏の説明、P—D—1〉。「王は、手をふりあげて頭に触れると、ただちに在家者の象徴が消え、沙門の象徴があらわれた。(Tasmiṁ khaṇe rājā hatthaṁ ukkhipitvā sīsaṁ parāmasi, tāvad ev' assa gihiliṅgaṁ antaradhāyi samaṇaliṅgam pātur ahosi.)」〈在家の象徴の消失、P—E—1〉。続いて辟支仏の八資具を記す一詩が述べられている。

「三つの衣に鉢、かみそりと針、帯紐と水こし袋、
この八こそは、修行に専念せる比丘のもの。」〈辟支仏の資具、P—F—1〉

Ticīvaraṅ ca patto ca vāsi sūci ca bandhanaṁ
parissāvanena aṭṭh' ete yuttayogassa bhikkhuno.

〔Jātaka III, p. 377.〕

この同じ詩は、ボーディサッタがトゥシタ天の都から覚りをひらくまでの因縁話を説くジャータカの『ニダーナカター』「遠くない因縁話(avidūrenidāna)」〔Jātaka I, p. 65〕においても語られている。ガティーカーラ大梵天が、出家したボーディサッタにこの八つの沙門の資具(samaṇaparikkhāra)を献じた、と記している。したがって、辟支仏の八資具と出家したブッダが身につけた沙門の八資具とは同じものである。このことは、辟支仏の起源がバラモンの苦行者と考えるよりは、沙門のなかに求めるべきことを示している。

ここで、辟支仏になった四王に共通することをもう一つ記しておかなければならない。ヒマラヤ山に住む四人の辟支仏がベナレスに托鉢に出かけるときの記述である。

四人の辟支仏は、「ナンダムーラ洞窟を出て、アノータッタ湖でビンロウ樹の楊枝を噛み（歯を磨き）、身体の注意をして、マノーシーラ平原に立って内衣を着け、鉢と衣をもち、神通力で空中にとびあがり、五色の雲をわけながら進み、バーラーナシーの都城門の村の近くにおりて（Nandamūlapabbhārā nikkhamma Anotattadahe nāgalatādantakaṭṭhaṁ khāditvā katasarīrapaṭijaggaṇā Manosilātale ṭhatvā nivāsetvā pattacīvaraṁ ādāya iddhiyā ākāse uppatitvā pañcavaṇṇavalāhake maddamānā gantvā Bārāṇasinagaradvāragāmassa avidūre otaritvā）」〔Jātaka III, p. 379.〕〈托鉢、P—H—1〉、と記されている。この記述は、ナンダムーラ洞窟から托鉢に出かける辟支仏について語るとき、ジャータカの他の箇所にもときどき見いだされるストックフレーズである。

以上は、散文の『ジャータカ』注をもとにして四王の辟支仏物語を整理して述べたが、ここで、それより成立の古い同『ジャータカ』の詩に目を注いでみたい。辟支仏になった四王について、同『ジャータカ』の第五詩ではこのように語られている。

「カリンガ〔国〕のカランドゥ〔王〕と、ガンダーラ〔国〕のナッガジ〔王〕と、ヴィデーハ〔国〕のミニ王と、パンチャーラ〔国〕のドゥンムカ〔王〕と、彼らは国を捨てて、何物ももたずに出家せり。」

Karaṇḍu nāma Kaliṅgānaṁ Gandhārānañ ca Naggaji
Nimirājā Videhānaṁ Pañcālānañ ca Dummukho,
ete raṭṭhāni hitvāna pabbajiṁsu akiñcanā. 〔Jātaka III, p. 381.〕

この詩では「出家せり（pabbajiṁsu）」とあって、辟支仏になったとは語られていない。また、第一詩から第四詩において、それぞれマンゴーの樹（amba）、宝石の腕環（sela）、鳥（dija）、牡牛（usabha）を見て、第四句はすべて「それを見て、乞食行へとわれは赴く（taṁ disvā bhikkhācariyaṁ carāmi）」と結ばれている。四王と対象との関係は、散文のジャータカ注のそれと一致した順序になっているが、第一詩から第四詩には王の名前が記されていない。

四王の名はジャイナ教聖典『ウッタラッジャヤナ』にも次のように伝えている。

「カリンガ〔国〕のカラカンドゥ〔王〕と、パンチャーラ〔国〕のドゥンムハ〔王〕と、

ヴィデーハ〔国〕のナミ王と、ガンダーラ〔国〕のナッガイ〔王〕と、」(46)

「かれら人王の勇者たちはジナの教えにおいて出家せり。

息子たちを王位につかせて、沙門になれり。」(47)

Karakaṇḍu Kaliṅgesu Paṅcalesu ya Dummuho,
Namī rāyā Videhesu Gaṅdhāresu ya Naggaī. (46)
ee nariṅdavasabhā nikkhaṅtā jiṇasāsaṇe,
putte rajje ṭhaveūṇaṅ samaṇṇe pajjuvaṭṭhiyā. (47) [Uttarajjhayaṇāṇi XVIII, 46, 47, Jaina Āgama Series 15.]

この詩では四王が何を見て出家したかについては記されていないが、Nijjutti における āryā 韻律の詩、それを引用したデーベンドラの注釈における śloka 韻律の詩ではこのようにうたっている。

「牡牛と、インドラ神の旗と、腕環と、マンゴーの樹とを対象にして覚りがひらけた、

カラカンドゥ〔王〕と、ドゥンムハ〔王〕と、ナミ〔王〕と、ガンダーラ〔国〕の王とに。」

vasahe ya indakeū valae ambe ya pupphie bohī.
Karakaṇḍu-Dummuhassā Namissa Gandhāraranno ya. (H. Jacobi, Erz., p. 34).

『ジャータカ』の詩と比較すると、カラカンドゥ王は牡牛(vasaha)、ドゥンムハ王はインドラ神の旗(indakeu)、ナミ王は腕環(valaya)、ガンダーラ国の王はマンゴーの樹(amba)を対象にして覚り(bohi)をひらいたと語られ、インドラ神の旗は『ジャータカ』にはない。四王と対象との関係も『ジャータカ』とは異なっている。デーベンドラの注釈では、四王が辟支仏になった物語を伝えているが、『ジャータカ』とは物語のニューアンスは異なっている。しかし、それらを対象にして辟支仏の覚りをひらいたという基本的なところは共通している。すでに述べたように、辟支仏の観念は、仏教では阿含ニカーヤの初期にはなく、その中期頃に成立しているが、ジャイナ教においても、古層聖典には辟支仏は現われない。『ナンディー』三八にジャイナ教の patteyabuddha が記され、『チュールニ』ではそれを注釈して、牡牛(vṛṣabha)等の外の原因(kāraṇa)を眺めて目覚めた者が辟支仏であり、カラカンドゥ〔王〕等である、と述べている。〔Nandisuttam with Cūrṇi, Prakrit Text Series Vol. IV, 1966, p. 26.〕

四王は、『ジャータカ』の第五詩では「何物ももたず

に出家せり(pabbajiṅsu akiñcanā)」、『ウッタラッジャヤナ』では「ジナの教えにおいて出家せり(nikkhaṅtā jiṇasāsaṇe)」、「沙門になれり(samaṇṇe pajjuvaṭṭhiyā)」と語られ、どちらも辟支仏になったとは言われていない。四王がマンゴーの樹等を見て出家して沙門になった伝説が古くから沙門の文学のなかにあり、やや後になってそれが辟支仏の観念と結びつき、仏教とジャイナ教に入ったものと思われる。

三

『ジャータカ』四五九「水前生物語」は、辟支仏の智をおこす対象は異なっているが、全体的に内容の構成は『ジャータカ』四〇八とよく似ている。

第一は、二人の友人が水瓶をもって畑仕事にでかけた。仕事の途中で、一人が自分の水を惜んで友人の水瓶から水を飲んだ。夕方、盗んで水を飲んだことに気づき、恐ろしくなって、「この貪欲が増大したら自分は悪趣に堕ちるだろう。この煩悩を制伏しよう」と考え、「水を盗んで飲んだこと〈盗み、P—A—5〉を対象として、その観念を増大させて、辟支菩提智を起こした〈P—B—2〉。そして獲得した智を思惟しながら立っていた。」(pāṇiyassa thenetvā pitaḥlāvaṅ ārammaṇaṅ katvā vipassanaṅ vaḍḍhetvā paccekabodhiñāṇaṅ nibbattetvā paṭiladdhañāṇaṅ āvajjanto aṭṭhāsi.)〔Jātaka IV, p. 114〕。ここでは、『ジャータカ』四〇八の〈P—B—1〉と比較して明らかなように、「三相を観察して」という言葉が入っていない。

第二は、村の地主が他人の美しい妻を見て、同じように考えて辟支仏の智を起こした。〈邪淫、P—A—6〉

第三は、父と息子が盗賊に捕まったとき、故意の妄言を言ってのがれた。息子がその妄言を反省して、同じように考えて辟支仏の智を起こした。〈妄言、P—A—7〉

第四は、村長が村人に犠牲祭のときに生物の殺生を認めた。自分の一言によって人々が殺生したことを後悔して、辟支仏の智を起こした。〈殺生、P—A—8〉

第五は、村長が村人に祭りのときに飲酒を認めた。人々は酒を飲んで喧嘩をした。地主はそれを見て後悔して、辟支仏の智を起こした。〈飲酒、P—A—9〉

同『ジャータカ』の第一詩から第五詩においては辟支仏になったとは言わず、「それゆえに、我は出家せり(tasmā pabbajito ahaṅ)」となっている。その内容はまったく同じく、友人の与えられざる(adinna)水を飲む、他人の妻を見て欲心(chanda)が生じた、知りながらそう

ではないように（aññathā）答えた、ソーマ祭のときに殺生（pāṇātipāta）を認めた、飲酒（majjapāna）を認めた、となっている。

第一から第五まで、それぞれ、盗み、邪淫、妄言、殺生、飲酒をおかして、それを対象にし、反省して辟支仏の智を起こしているが、それらは、言うまでもなく仏教の五戒と関連している。『ジャータカ』四〇八における辟支仏になった四王の対象は必ずしも仏教的ではないが、五戒は、在家信者がまもる戒であるが、仏教のものである。辟支仏と五戒とを結びつけたのは、ジャータカの作者達であろう。『ジャータカ』四〇八を知っている作者が、それをモデルにしながら、対象を五戒にしたとも考えられるが、はたしてそうであろうか。五戒を対象とする例は、他のジャータカでは見られない。

ところで、辟支仏になった五人はそれぞれ空中に立って教えを説き、ナンダムーラ洞窟に行くのであるが、辟支仏になったときの事情、姿について、第一の場合、次のように記され、第二以下は省略されている。辟支仏智を得た一人が友人に、「わたしは家に用はない。辟支仏というものだよ」と答えた。「辟支仏は君のような者であるか」、「では辟支仏とはどのようなものであるか」〈P—C—2〉、「辟支仏は二指の長さの髪をして、袈裟衣を着け、北の雪山のナンダムーラ洞窟に住んでいるのだよ。」（Dvaṅgulakesā kāsāyavatthavasanā Uttarahimavante Nandamūlakapabbhāre vasanti.）〈P—D—2〉

「彼は頭を撫でた。するとただちに彼の在家の象徴は消えた。（So sīsaṁ parāmasi, taṁ khaṇaṁ yev' assa gihiliṅgaṁ antaradhāyi.）〈P—E—2〉. 真紅の重ね衣を着け、電光にも似た腰帯を締め、赤い色の上衣を片はだにし、雲の色の糞掃衣を両肩に置き、蜂色（黒）の粘土製の鉢を左肩に下げていた。（surattadupaṭṭaṁ nivattham eva, vijjullatāya sadisaṁ kāyabandhanaṁ baddham eva, alattakapāṭalavaṇṇaṁ uttarāsaṅgacīvaraṁ ekaṁsakatam eva, meghavaṇṇaṁ paṁsukūlacīvaraṁ aṁse ṭhapitam eva, bhamaravaṇṇo mattikāpatto vāmaṁsakūṭe laggito va ahosi.）〈P—F—2〉. 彼は空中に立って説法をなし、それから空高く昇って、ナンダムーラ洞窟へ降りた。（so ākāse ṭhatvā dhammaṁ desetvā uppatitvā Nandamūlakapabbhāre yeva otari.）〈P—G—2〉」〔Jātaka IV, p. 114.〕

「彼は空中に立って（ṭhatvā）説法をなし、……ナンダムーラ洞窟へ降りた（Nandamūlakapabbhāre yeva otari）」

〈P—G—2〉は、第二から第四までは「立って（thito）」、「ナンダムーラ洞窟へ行った（Nandamūlakapabbhāram eva gato）」となっている。〈P—G—3〉. 第五のみには、「彼は空中に立って、お前たちは怠けてはいけない（appamattā hothā）、と説法をなし、……」という説法の内容が含まれている。〈P—G—4〉

以上によって明らかなように、『ジャータカ』四〇八の辟支仏物語にたいへん類似した記述があらわれている。まず、覚りについて、「を対象として、その観念を増大させて、辟支菩提智を起こした」〈P—B—2〉に対して、「樹の根もとに立ちながら、三相を観察し（tīṇi lakkhaṇāṇi sallakkhetvā）」〈P—B—1〉という言葉が挿入されている。また、辟支仏になった時の対話〈P—C—2〉も、〈P—C—1〉と内容的に同じである。辟支仏を説明する〈P—D—2〉は、髪の長さ、袈裟衣、ナンダムーラ洞窟を簡潔に記すだけであるが、〈P—D—1〉では、頭髪と髭が剃られ、家族や種族に近づかず……などの世俗を離れた辟支仏の姿を説明する言葉が挿入されている。「彼は頭を撫でた。するとただちに彼の在家の象徴は消えた」〈P—E—2〉は、〈P—E—1〉では、「沙門の象徴（samaṇaliṅga）があらわれた」という言葉が付加されている。「彼は空中に立って説法をなし（dhammaṁ desetvā）、それから空高く昇って、ナンダムーラ洞窟へ降りた」〈P—G—2〉は、〈P—G—1〉では、「大衆に（mahājanassa）説法し（ovādaṁ datvā）」とあって、「大衆に」という語が入っている。さらに、「空高く昇って（uppatitvā）」が「虚空を通って（anilapathena）」になり、また、「北のヒマラヤ山にある（Uttarahimavante）」という言葉が挿入されている。

『ジャータカ』四五九と『ジャータカ』四〇八における辟支仏の記述は近似していることは明らかであるが、両者を比較検討した結果、四五九に対して四〇八のすべての記述に挿入、付加が見られることを指摘した。このことによって何が言えるであろうか。四〇八のジャータカ注作者は少なくとも四五九を知っていて、それに挿入、付加をなした、と言えるのではなかろうか。

四

『ジャータカ』三七八「ダリームカ辟支仏前生物語」と『ジャータカ』五二九「ソーナカ辟支仏前生物語」とは、同日生まれの王子（ブッダの前生）と王の司祭の子との物語である。二人は竹馬の友であり、王子は王位に

つき、司祭の子は辟支仏になる。後に辟支仏（司祭の子）が王（かつての友）のところにやって来て説法し、出家を勧める。両ジャータカは、内容は異なるが、基本的な筋に共通点が見られる。

『ジャータカ』三七八では、王子がバーラーナシー王になった時、司祭の子ダリームカは宮苑に行って王子が坐っていた吉祥の石(maṅgalasilā)のうえに坐った。その時、彼の面前に枯葉(paṇḍupalāsa)が落ちてきた。「彼はその枯葉〈P—A—10〉に対して無常を思い、三相を思惟し、大地を震動させながら辟支菩提を起こした。(So tasmiṁ yeva paṇḍupalāse khayavayaṁ paṭṭhapetvā tilakkhaṇaṁ sammasitvā paṭhaviṁ unnādento paccekabodhiṁ nibbattesi.)〈P—B—3〉. ただちに彼の在家の象徴が消えた。(Tassa taṁ khaṇaṁ ñeva gihiliṅgaṁ antaradhāyi.)〈P—E—3〉. 神通力によって生じた衣鉢が虚空から降りてきて、彼の身体についた。ただちに彼は八資具を具え、行住坐臥を正しく身につけた百歳の長老のようになり(iddhimayapattacivaraṁ ākāsato otaritvā sarire paṭimucci, tāvad eva aṭṭha-parikkhāradharo iriyāpathasampanno vassasatikathero viya hutvā)〈P—F—3〉、神通力によって空中に高く昇って、ヒマラヤ地方にあるナンダムーラ洞窟に去った。(iddhiyā ākāse uppattitvā Himavantapadese Nandamūlapabbhāraṁ agamāsi.)〈P—G—3〉」〔Jātaka III, p. 239-240.〕五〇年後にダリームカ辟支仏は王のところにあらわれて、諸欲における罪障を説き、出家を勧め、再びナンダムーラ洞窟に帰った。

一方、『ジャータカ』五二九では、司祭の子の名はソーナカである。王子が王位についた時、王子が坐っていた平石(silāpaṭṭa)のところに行って、その上に坐った。その時、彼の面前に枯葉(paṇḍupalāsa)がサーラ樹の枝を離れて落ちてきた。彼はこの枯葉〈P—A—11〉を見て、「これと同じように、私の身体も老いて落ち去るであろう」と、「無常等により内観して辟支菩提を得た。(anicādivasena vipassanaṁ paṭṭhapetvā paccekabodhiṁ pāpuṇi.)〈P—B—4〉. ただちに彼の在家の象徴が消え、出家者の象徴があらわれた。(taṁ khaṇaṁ ñev' assa gihiliṅgaṁ antaradhāyi, pabbajitaliṅgaṁ pātur ahosi.)〈P—E—4〉. 彼は、「今や再び生まれることはない」と感興のことばを唱えながらナンダムーラ洞窟に去った。(so "n'atthi dāni punabbhavo" ti udānam udānento Nandamūlakapabbhāraṁ agamāsi.)〈P—G—4〉」〔Jātaka V, p. 248〕. ソーナカ辟支仏は、五〇年後に王と再会し、王

に教えを説いている。

ところで、三七八と五二九の両ジャータカに共通して、王子が坐っていた平石のうえで枯葉を見て辟支仏になっている。後者はサーラ樹の枯葉になっている。覚りについては、前者は、「枯葉に対して無常（khayavaya）を思い」となっているのに対し、後者では「これと同じように、……」という言葉になっている。「三相を思惟し（tilakkhaṇaṁ sammasitvā）」は、「無常等により内観して（aniccādivasena vipassanaṁ paṭṭhapetvā）」になっているが、内容は同じであろう。辟支仏の姿については、後者には含まれていない。また、〈P—E—4〉では「出家者の象徴があらわれた」という言葉が付加されている。〈P—G—3〉と〈P—G—4〉では、後者に感興のことばが挿入されている。以上、共通する部分を比較して、前者より後者に挿入、付加が若干多く見られる。

五

『ジャータカ』四二一「理髪師ガンガマーラ前生物語」は、王の理髪師が辟支仏になる物語である。ガンガマーラは、王が前生で半分の布薩行をなしたことによって王に幸が得られたことを聞き〈P—A—12〉、善はなすべきものと思い、出家を決意した。彼はヒマラヤに行き、仙人としての出家をして（isipabbajjaṁ pabbajitvā）、「三相を観じて、観念を増大させて辟支菩提を得て（tilakkhaṇaṁ āropetvā vipassanaṁ vaḍḍhetvā paccekabodhiṁ patvā）〈P—B—5〉、神通力によって生じた衣鉢を身につけ（iddhiyā nibbattapattacīvaradharo）〈P—F—4〉、ガンダマーダナ山中に（Gandhamādanapabbate）五、六年住した。」〔Jātaka III, p. 452〕. その後、王に会いに来た。王はとどまるように勧めたが、王とその一行の面前で、「空中に立って、王に教えを説き、ガンダマーダナへ行った。（Paccekabuddho …ākāse ṭhatvā rañño ovādaṁ datvā Gandhamādanam eva gato.）〈P—G—5〉」〔ibid. p. 453〕

ここでは、王とは、ブッダの前生であるボーディサッタであり、その王から話を聞いて理髪師が出家の決意をした。この点は、今までとりあげた対象とは異なっている。さらに、王の話の直後に辟支仏になるのでなく、ヒマラヤに行ってから三相を観じて辟支菩提を起こしている点も他と相違している。また、ナンダムーラ洞窟ではなく、ガンダマーダナ山になっている。

『ジャータカ』四九一「大孔雀王前生物語」もブッダの前生であるボーディサッタの教えを聞いて辟支仏にな

る物語である。王の命によって、猟師が長年月をかけて孔雀（ボーディサッタ）を捕らえた。孔雀が彼に地獄の恐ろしさを教える〈P—A—13〉と、「実に彼は波羅蜜を成就した辟支菩薩となり、太陽の光線に触れることをのぞんで立っている成長した蓮華のように、完成した智を得て行動した。（So pana pūritapāramipaccekabodhisatto suriyarasmisaṁphassaṁ oloketvā ṭhitaṁ pariṇatapadumaṁ viya paripākagataṅāṇo vicarati.）彼（猟師）は、彼の法話を聞きながら、立ちどころに諸行〔無常〕を了解し、三相を思惟しながら辟支菩提智を証した。（So tassa dhammakathaṁ suṇanto ṭhitapaden' eva ṭhito saṁkhāre parigaṇhitvā tilakkhaṇaṁ sammasanto paccekabodhiñāṇaṁ paṭivijjhi.）〈P—B—5〉」〔Jātaka IV, p. 340〕

ボーディサッタに言われて、彼が自分の家のすべての鳥を解放するという誓いをして、ただちに鳥が解放された。

「辟支仏は手をあげて頭を撫でた。直ちに在家の象徴が消えた。出家者の象徴があらわれた。（Pccekabuddho hatthaṁ ukkhipitvā sīsaṁ parāmasi, tāvad eva gihiliṅgaṁ antaradhāyi, pabbajitaliṅgaṁ pātur ahosi.）〈P—E—5〉. 彼は六〇才の長老のように威儀を正しくそなえ、八資具を身につけて（So saṭṭhivassathero viya ākappasampanno aṭṭhaparikkhāradharo hutvā）〈P—F—5〉、「あなたは私の偉大なよりどころであった」と孔雀王に合掌し、右まわりして空中に高く昇ってナンダムーラ洞窟に行った。（"tvaṁ me mahatī patiṭṭhā ahosīti" morarājassa añjalim paggayha padakkhiṇaṁ katvā ākāse uppatitvā Nandamūlakapabbhāraṁ agamāsi.）〈P—G—6〉」〔ibid. p. 342〕

辟支仏の覚りに関して、「波羅蜜を成就した辟支菩薩……」という言葉が挿入されている。これはまったく他に見られず、辟支仏の観念についての発展解釈と理解することができないであろうか。〈P—G—6〉については、孔雀王に対する敬意の表現が付け加えられている。

『ジャータカ』四二一の理髪師も四九一の猟師もバラモンやクシャトリヤではない。両者ともボーディサッタの話を縁にして辟支仏になった点で共通し、他の辟支仏物語とは異なっている。

六

『ジャータカ』五三九「マハージャナカ前生物語」は、マハージャナカ王（ボーディサッタ）が辟支仏にあこがれ、出家を決意して、後を追う王妃をふりきって、ヒマ

ラヤに入っていく物語である。ヒマラヤに入り、神通力や八等至を修得した、と記している。辟支仏に関係する多くの記述がそこに見られる。

まず、王がマンゴーの樹を見て出家を決意している。この部分は、『ジャータカ』四〇八における辟支仏になったカリンガ国のカランドゥ王物語〈P—A—1〉と同じである。王は、マンゴーの樹を見たときから王宮にこもった。市場から袈裟衣と粘土製の鉢とを買って持ってこさせ、髪や髭を剃り、三つの衣を身につけ、鉢を袋にいれて肩にかけた。杖をもって、大広間のなかを辟支仏の境地に浸りながら歩き回った。

王が王宮をぬけだし歩いて行くと、子供が籠で砂をふるっていた。少女の一方の腕には一つの腕環が、もう一方の腕には二つの腕環がついていた。二つの腕環はぶつかりあって音をだし、一つのほうは音をださなかった。二つのものがあれば口論が生じ、一つでは生じない。これによって、王はますます出家の決意を強くした。この物語は、多少ニューアンスが異なるが、『ジャータカ』四〇八におけるガンダーラ国のナッガジ王物語〈P—A—2〉に近似している。

ここではマハージャナカ王は、ブッダの前生のボーディサッタであり、辟支仏になろうと努力するが、辟支仏になることができない。ボーディサッタは生まれかわって将来ブッダになるお方である。それに対して、すでに迷いの生存をこえた辟支仏は般涅槃するから、再び生まれかわることはない。

『ジャータカ』五三九は辟支仏になった物語ではないが、辟支仏物語に準ずる物語として、たいへん興味深い。

七

以上とりあげた辟支仏物語は、辟支仏になる対象、縁という点から、次のように分けることができる。

(a) 四〇八「陶師前生物語」はマンゴーの樹、腕環、鳥、牡牛。

(b) 四五九「水前生物語」は五戒。

(c) 四二一「理髪師ガンガマーラ前生物語」と四九一「大孔雀王前生物語」とはボーディサッタの教え。

(d) 三七八「ダリームカ辟支仏前生物語」と五二九「ソーナカ辟支仏前生物語」とは枯葉。

対象に続く覚りの内容については、多少表現は異なるが、「三相を観察し、観を増大させて辟支菩提智を起こした」となっている。「三相」について言わないのは、

四五九と五二九とである。五二九の場合は、三相という言葉はないが、「無常等(aniccādi)により内観し」となっていて、三相と内容は同じである。ところが、四五九では、五戒を犯したことを反省して、「その観念を増大させて、辟支菩提智を起こした」〈P—B—2〉となっている。これは、五戒を犯したという罪の意識をもとにした自覚であり、無常、苦、無我の三相による自覚とは異質である。(a)と(b)とにおける辟支仏の記述は近似していることについて前述したが、自覚の内容の点から見れば、異なっている。

すでに述べたように、ジャイナ教の『ナンディー』三八の『チュールニ』では、牡牛等の外の原因を眺めて目覚めた者が辟支仏である、と注釈されていた。この「外の原因」に符合するのは、(a)の対象と(d)の枯葉とである。(b)の五戒による反省という内的な原因も、(c)のボーディサッタの教えも、ジャイナ教の解釈には当てはまらない。もしジャイナ教の解釈が辟支仏についての本来の意味を伝えているとするならば、(b)の五戒と(c)のボーディサッタの教えとは、仏教における辟支仏観念の展開であると考えられる。ジャイナ教文献との比較によって、もっとこの点を解明しなければならない。

この四つの分類を、辟支仏になった人という観点から見れば、どうであろうか。(a)は、四人の王である。(b)はそれぞれ、村の友人(sahāyaka)は盗み、地主(kuṭumbika)は邪淫、村の住民である父子のうちの子は妄言、村長(gāmabhojaka)は殺生、村長は飲酒、である。すなわち、バラモンやクシャトリヤ以外の村の一般の人々である。(c)は理髪師と猟師とであり、(d)は二人ともバラモンである。バラモン、王族だけでなく、あらゆる階級の人々も辟支仏になれることを示している。とくに、(b)と(c)の人々をも含めたのは平等をかかげる仏教の精神にもとづくものと思われる。この点からも、(b)と(c)とは仏教における辟支仏観念の展開と見ることができる。

参考文献

櫻部建「縁覚考」『大谷学報』三六—三、昭和四一年、四〇～五一頁。

藤田宏達「三乗の成立について——辟支仏起源論——」『印度学仏教学研究』五—二、昭和三二年、九一～一〇〇頁。

村上真完・及川真介『仏と聖典の伝承』、春秋社、一九九〇年、三三五～三四九頁。

H. Jacobi: Ausgewählte Erzählungen in Mahārāshṭrī, Leipzig, 1886.

Jarl Charpentier: Paccekabuddhagesichten, Upasala,

1908.

Jarl Charpentier ed. The Uttarādhyayanasūtra, Ajoy Bood Service, New Delhi-110002.

Ria Kloppenborg: The Paccekabuddha, Leiden, 1974.

K. R. Norman: The Pratyeka-Buddha in Buddhism and Jainism, Collected Papers Volume II, The Pali Text Society, 1991, pp. 233-249.